

知の個別性と全体性

——プラトン初期・中期対話篇における技術と能力の対象概念について——

岩田 直也

0. 序

プラトンは、『国家』中心巻において、存在と認識の究極的な原理として〈善〉のイデアを構想した。後にアリストテレスが、知の対象の性格と知の機能に応じて、それぞれの知識を明確に区別したことを起点として、現在のわれわれもそのような区分を常識的に受容していることを考えると、プラトンによるこの構想は、すべての知がなんらかの意味で究極的な存在に関わる全体的な認識であることを示唆しているという点で非常に興味深い。

けれども、「プラトンは、ひとつひとつの知がそれぞれ、他の知らないし倫理的知をも含むという仕方で、全体的知となることを要求した」というような主張がしばしばなされることがある¹。たとえ個別的な知がなんらかの意味で全体性に関わるとしても、そのような仕方での知の結びつきをプラトンが実際に構想したのかどうかということに関しては、他の箇所における発言と照合しながらよく吟味しなければならない。というのも、プラトンもまた多くの場合に知の個別性を保持しているというだけでなく、それらの知の対象を厳格に区別しているように思われるからである。実際、初期対話篇の『イオン』において「ある技術（知識）によって知られることは、他の技術によって決して知られることはない」という「技術と対象の一対一対応」の原則をプラトンが主張し、中期対話篇の『国家』第五巻において「能力と対象の一対一対応」としてこの原則を能力一般に敷衍しているという事実は、彼が初期から一貫して上記のような知の全体性を拒否している証拠ともなるだろう。

¹ Benson (89-91) は、例えば、医術の領域である身体の健康の知識を得るものは、身体の健康の回復に関する正しい判断ができるのと同様、必ず身体の健康の維持に関する正しい判断もできるので、真の医術は体育術にもなる、と述べている。この考えをさらに推し進めれば、さらに多くの知識が一体的であることを必要とされるだろう。また瀬口 (100-103) は、それぞれの技術知がその内部に倫理的知をもつ必要を述べているが、これもある仕方で個別的知を全体的知に押し広げる要求である。後者の技術と価値の問題については、稿を改めて詳しく論じる予定である。

ただ、プラトンによるこの「技術(能力)と対象の一対一対応」の原則は、そこで対象となるものがいかなる規定を与えられているか明快でないために、上記のような主張を容認するほど様々な仕方で解釈されてしまっている現状にある。そこで本稿では、技術(能力)と一対一対応に対応すると述べられる対象概念の分析に焦点をあてることで、プラトンによって知の個別性がどのように確保されているか確認することを目指す。ただし、その上でそれぞれの技術(知識)が究極的な存在ないし全体的な認識とどのように関わるのか、という問題にまで直接論じることはしない。けれども、本稿での考察はそのような知の個別性と全体性の問題に密接に関連するものであり、それらを論じるにあたっての準備作業ともなるだろう。

また、本稿の考察範囲は主にプラトンの初期・中期対話篇に限定し、前半部は技術と対象の関係、そして後半部は能力と対象の関係を論じる。

1. 技術と対象の一対一対応の原則

それでは、まず次の『イオン』の記述を見てみよう。

「とすると、どうだろうか、一方の技術はある事柄を対象²とした知識

² ギリシア語原文においては、技術(または知識、能力)と何らかの関わりを表す言葉(その関わりが能動動詞の目的語や受動動詞の主語、また動形容詞によって表わされることも当然ある)として、プラトンは属格、ἐπί, περί, ἐν (Chrm. 171a-b), πρὸς (Chrm. 168d) など多くの語を用いている。Parry (15) は、技術の対象を生物と無生物に分類した上で、対象が生物の場合には技術の役割は「世話的」(therapeutic)、対象が無生物の場合には技術の役割は「生産的」(productive)と述べ、そして前者の対象には ἐπί という語が用いられていると主張する。確かに、彼が参照した『ゴルギアス』464b4-7では魂と身体に ἐπί が用いられているが、後のパラレルな議論(517c9-d1)では περί が用いられ、特別な注意もなく ἐπί と περί の言い換えが行われている。さらに瀬口(104)も Parry と同様の立場をとり、技術の正確な意味での対象(技術が対象の善を求めるとした場合の対象)を示す際には、プラトンが ἐπί を用い、文字通りアバウトに関係を認める際には περί を用いていると述べる。しかし、この見解も上述の『ゴルギアス』の両箇所では、体育術と医術がその善を求めるとして ἐπί と περί が同様に用いられていることから不整合である。また、金山(5-9)は、ἐπί+与格と περί+属格、περί+対格の三通りの対象を体系的に検討し、ἐπί+与格と περί+属格がそれぞれ異なる関わり方を表わし、περί+対格はそのどちらにも使われていると主張する。そして、知識も思わくも考察の対象(περί+属格)としては同じものを対象とするが、両者ではその考察の到達点(ἐπί+与格)が異なると結論する。しかしながら、金山自身も認めているように、『ゴルギアス』において περί+属格と περί+対格は互換的に使用されているため、私には結局 ἐπί+与格と περί+属格がそのようにプラトンによってはっきり区別されているか疑わしいように思われる。実際、技術と一対一に対応する対象はここで引用した『イオン』の箇所では属格で表わされているが、その直後(538b5-6)では περί+属格によって言い換えられている。また金山は、前置詞による対象の分類において、技術や知識がその対象と実践的に関わる場合を除外しているが、プラトンによって

(ή...πραγμάτων...ἐπιστήμη)であり、他方の技術はそれとは異なる事柄を対象とした知識である場合、僕はその事実をもとにして、それぞれの技術を、別々の名で呼ぶのであるが、君もまたそのようにするだろうか。(中略)というはおそらく、もし同じ事柄を対象とした何らかの知識があるとするならば、われわれは、何を持って、これを異なる別々の技術であると、主張することができるだろうか。」(537d4-e3)

ここで「技術の対象が異なるならばそれぞれの技術も異なる」こと、そして次に「対象が同じならば技術も同じである」ことが同意されている。けれども、この同意をわれわれはただちに受け入れることはできない。なぜなら、同じ技術が異なる対象をもつ可能性と、異なる技術が同じ対象をもつという二つの可能性が全く無視されてしまっているのだから。対象が異なるならば技術も異なることはひとまず理解できるとしても、対象が同じならば技術も同じという主張は決して自明なことではないだろう。

このように理解しがたい問題はあるにしろ、「技術と対象の一対一対応」の原則は実際にソクラテスの対話における様々な場面で重要な前提となっている。例えば、『イオン』の後半部において、イオンの吟遊の技術が否定されたのは、それに固有の対象を特定できなかったためであり、また『ゴルギアス』において、弁論術とは何か探求する際にも、やはり対象を特定することがソクラテスの方針である³。

しかしながら、この原則をプラトンがあからさまに破っているように思われる箇所がある。つまり、異なる技術が同じ対象をもつことを認めるかのような発言をソクラテス自身がしているのである。例えば、『ゴルギアス』においてソクラテスは、数論の技術と計算術は「両者とも偶数と奇数という同一のものに関わる(περὶ τὸ αὐτὸ, 451c2)」と述べ、さらにポロスに対して弁論術に関する自己の見解を披瀝する際には、「身体を扱う(ἐπὶ σώματι)技術は、(中略)二つの部門に分かれています。すなわち、その一つは体育術、他の一つは医術(464b4-7)」と述べている。さらに、これら二つの真の技術に加えて、化粧術と料理術の二つの技術も、似非技術としてであるけれどもともに身体を扱うとさ

認識と実践の両局面が非常に親しい用語によって語られていることもあり (e.g. *Rep.* 346d と 477d)、技術(知識、能力)の対象を統一的な視点から論じる必要があると私は思う。以上より、本稿では、プラトンが技術(能力)と一対一に対応すると述べている対象概念の理解を通じて、その一対一対応の原則と一見矛盾するように見える他の記述を整合的に解釈することを目指す。

³ その他『カルミデス』171a-b など。

れている。プラトンは結局、異なる技術が同じ対象をもつことを認めているのだろうか。

2. 内包的対象と外延的对象

Kahn は『イオン』で提示されたこの「技術と対象の一対一対応」の原則に関して、次のように述べている。

この基となる原則は、もし「対象」の概念を内包的に (intensionally) 理解するのならば、すなわち、それが知識を得る方法によって定義されるものである限り、正当であるのは明らかだ。(中略)しかし他方、この原則が、もし「対象」を、世界の様々な部分、すなわち、事物や個々の存在の様々な集合を指示するものとして外延的に (extensionally) に理解するのならば、むしろ問題のあるものとなる。この意味では、異なる知識が結局同じ事物を研究することになりうるように思われる⁴。

Kahn が指摘する外延的对象の問題点を補足して説明すると次のようになる。例えば、人類学や心理学、言語学、人類遺伝学などの技術は、「人間」という概念が適用される様々な事物や事柄を扱っているかもしれないが、それらは結局「人間」という同じ対象をもっているのではないか、ということだ。したがって、このような外延的对象を想定するのならば、「技術と対象の一対一対応」の原則を厳守する限り、それらの技術はすべて個別の知ではなく、同一の知の異なる側面でしかないことになる。さらに、他の多くの技術もまた同様の議論によって、「人間」という対象に関わる限り、同じ知として区別できなくなるという帰結は必至だろう。実際、先に見た Benson は「身体」という外延的对象を想定することで、医術と体育術は同じ知となる、と主張していたのである⁵。

また、プラトンが技術と一対一に対応する対象を外延的に捉えていたのならば、先の『ゴルギアス』の記述のように、彼は明らかにこの原則に違反しているという批判を避けることができないはずである。この矛盾を解消することはできないのだろうか。Kahn は内包的対象を「知識を得る方法によって定義されるもの」と言い換えるのみで、その内実をあまり明らかにしていないが、私は Kahn の基本的路線に従い、内包的対象のさらなる分析がこの問題を解く鍵

⁴ Kahn ([3], 108-9) .

⁵ 注 1 参照。

だと考えている。

3. 技術の対象と働きを同一視する解釈とその批判

ある解釈者たちは、この対象の内包的理解とは少し異なる仕方では、一対一対応の原則の矛盾を解消することに努めている。その仕方とは、この原則から「対象」の観点を実質的に排除してしまうものである。私の立場をより明確にするためにも、これらの解釈を慎重に検討してみよう。

その前にまず、『イオン』において先の一対一対応の原則を提示した直後に、プラトンが課した次の条件を確認する必要がある。

「いやしくも両者（の技術）によって、同じことがらが知られうるかぎりはね。たとえばこうだ、「これらの指は五本ある」ということを、ぼくの方も知り、君もまた、ぼく同様に、それらの指に関して（περί τούτων）、同じことを知るとする。そして、もしぼくが君に、ぼくと君とは、数論の技術という同じ技術によって、同じことを知るのか、それとも、別々の技術によって知るのか、とたずねるとすれば、きっと君は、同じ技術によって、と主張するだろう。」(537e3-8)

ここで、数論の技術は「指」に関わっているが、「指」それ自体が技術と一対一に対応する対象でないことは明らかだ。そうではなく、「指」に関して「同じことを知る」という場合のその認識内容が、この対象の規定に重要な役割を果たしていることがわかる。つまり、数論の技術が「指」という外延に関わることは一対一対応の原則において何ら問題ではなく、それについて「5本ある」という事態を知ることこそが問題にされているのである。

この場合、当然、異なる技術がある同じ「指」に関わる可能性が残されることになる。それでは、一体どのように対象の区別を説明するのか。もともとこの一連の議論は、

Οὐκοῦν ἐκάστη τῶν τεχνῶν ἀποδέδοται τι ὑπὸ τοῦ θεοῦ ἔργον οἷα τε εἶναι γινώσκειν ; (537c5-6)

(A) それぞれの技術には、何か一つの働きを知ることが神によって可能とされているのではないか。

(B) それぞれの技術には、知ることができるように何か一つの働きが神によって与えられているのではないか。

という言明を詳しく説明するためになされたものであった。通常この箇所は(A)のように訳出されている⁶。したがって、ある解釈者たちは、この一連の議論を典拠にして⁷、技術と一対一に対応する対象は正確にはそれぞれの技術の「働き」(エルゴン)と同一である、とした。それぞれの技術は、それぞれ固有の働きをもち、まさにその働きを知の対象としている。換言すれば、これは「技術と対象の一対一対応」を「技術と働きの一対一対応」とみなすことで原則を保持する解釈である。

このエルゴンという語は、とりわけ実用的な諸技術の場合に顕著な特徴として、我々の「仕事」という言葉同様、機能と所産の区別が曖昧である。例えば、大工の仕事は「家を建てること」であり、建てられた「家」は大工の仕事とも言える。そのため、理論的な諸技術の所産をどのように考えるかという問題はさておき⁸、確かに技術の対象が、正確にはそれぞれの技術の所産と同一視されるという見方はそれほど不自然な読み方ではない。つまり、医術のエルゴン(所産)は「健康」であり、医術の対象も「健康」である、と。さらにまた、理論的な諸技術の所産を否定してエルゴンの機能的側面に着目するとしても、例えば、数論の技術のエルゴン(機能)は「数を数えること」で、数論の技術の対象も「数を数えること」といったような仕方に対象を働きに還元する解釈を採用すれば⁹、すべての技術について同様に対象をエルゴンに同化させることができるだろう。

しかしながら、このような解釈を採る限り、対象は働きと同一なのだから、ソクラテスはそれぞれの技術の個別性を問う場合にわざわざ対象を問うのではなく、その働きを特定すればよいはずである。けれども、上述のようにソクラテスにとって技術を同定する主な方法は「何について(περὶ τί)」(Gorg. 449d1)を明らかにすることであった。この問いかけによってソクラテスが要求していることは、「健康」などの所産の場合ならまだしも、「数を数えること」などの機能であると考えることは難しい。また、先の『イオン』537c5-6 の訳出に関しても、働き

⁶ 目を通すことができた限りすべての訳者がひとまず採用している読み方である。(A)は、 $\tau\iota \ \epsilon\rho\gamma\omega\nu$ を $\gamma\iota\gamma\nu\omega\sigma\kappa\epsilon\upsilon\nu$ の目的語に読み、 $\alpha\pi\omicron\delta\acute{\epsilon}\delta\omicron\tau\alpha\iota$ は非人称と解するものである。しかし、どれも(A)の訳を採用した理由は特に明記されてはおらず、Canto が正しく指摘するように、 $\tau\iota \ \epsilon\rho\gamma\omega\nu$ を $\alpha\pi\omicron\delta\acute{\epsilon}\delta\omicron\tau\alpha\iota$ の主語にとり、 $\omicron\iota\alpha \ \tau\epsilon \ \epsilon\iota\nu\alpha\iota \ \gamma\iota\gamma\nu\omega\sigma\kappa\epsilon\upsilon\nu$ を目的の不定詞とする(B)の読み方も十分可能である。

⁷ Brickhouse and Smith (6) .

⁸ Irwin (298, n.44) は例えば、計算術などの理論的技術もエルゴン(所産)を持ち、それは計算過程それ自体とは異なる計算の結果であると考え。これに対し、Roochnik (188) は計算術には計算過程と明確に分離できるような所産はないと批判している。

⁹ Gosling ([2], 124) .

を認識の対象とする(A)ではなく、認識の対象についてはオープンとする(B)の読み筋にも十分な可能性がある。さらにより直接的な反証として、その他の対話篇には、技術の対象と働きが分けて考えられていたことを示す典拠がある。例えば、『カルミデス』165e5-166a7 においてプラトンは働きと対象の区別を次のように述べている。

「計算とか幾何の技術のばあいを考えてみますと、建築家の家、機織術の着物というぐあいに、ほかの多くの技術にはそれなりにはっきり指し示すことのできる働き(ἔργον)がたくさんありますが、計算とか幾何の技術には、それらに類似した働きとして何がありますか。さあ、あなたとしては、問題の計算や幾何の技術のばあいに、それらに類似したひとつの働きを指し示すことがおできになりますか。いや、けっしておできにならないでしょう！」

そこで、ぼくは答えた。「ほんとうに、きみの言うとおりのだ。しかし、まあ、つぎのことはきみに指し示すことができる。つまり、それらの知がそれぞれ何について(τίνος)の知なのかということはね。しかも、この対象は、その当の知そのものとはまさしくちがうものなのだよ。たとえば、計算の技術は、たぶん、偶数と奇数についての知であり、偶数どうし、奇数どうし、また偶数と奇数どうしの間で、どのような数量的関係をもつかということの知なのだ(τοῦ ἀρτίου καὶ τοῦ περιττοῦ, πλήθους ὅπως ἔχει πρὸς αὐτὰ καὶ πρὸς ἄλληλα)。そうだね？」

ソクラテスは、計算術の働きをはっきりと述べることはできないが、少なくともその対象が「数量的関係をもつ偶数・奇数」である、と述べている¹⁰。確かに、技術の働きと対象は、時に融合しているように見える程互いに緊密な連関をもつとしても、それでもやはり、この言明はプラトンによって技術の対象がその働きと区別されていること示している。

4. 技術の対象の内包的規定

それではここまでの考察によって、技術と一対一に対応する対象とはどのようなものと考えたらよいだろうか。まずそれは、外延的对象としての「指」や「偶

¹⁰ Irwin (298, n.44) はここで計算の技術の対象は「偶数と奇数」であり、働きが「偶数どうし、奇数どうし、また偶数と奇数どうしの間の数量的関係」だと主張しているが、これは働きを示すことが容易でないとするソクラテスの発言と整合しない。

数・奇数」などの物事それ自体ではない。そうではなく、それらが「5本ある」という性質や「数量的関係」という内容、ないし、そのような性質や内容などの事態が第一義に置かれるような「5本ある指」や「数量的関係をもつ偶数・奇数」である。事態が第一義に置かれるとは、つまり、ある技術と一対一に対応する対象はその技術に固有の「ある事態にある物事」なのであり、それゆえその外延としては様々な物事を許容するという意味においてである。ただし、その対象は技術の働きに還元されるようなものではない。「指が5本あること」や「偶数・奇数が、偶数どうし、奇数どうし、また偶数と奇数どうしの間で数量的関係をもっていること」は、数論の技術や計算術が「数を数えること」や「数量計算すること」などの働きをなしとげる前にも、すでにこの世界に何らかの仕方では含まれている。そしてこのように解釈して初めて、後に能力論全般についても論じるように、それぞれの技術がなしとげる固有の働きが、その対象とは区別されていながら互いに緊密な関係にあることもよく理解されるだろう。

したがって、多くの技術が同じ物事に関わるとソクラテスがためらいなく述べるのも決して誤謬なのではなく、議論の目的によってその意味内容まで特定することもあったりなかったりしているだけなのである。実際に、ソクラテスは数論の技術と計算術は「偶数と奇数」に関わると述べているが、それらの技術の相違が問題にされる時は、「(数論の技術は)偶数と奇数——それぞれが具体的にいくらの数であるかということにかかわりなく——を対象とするもの(Gorg. 451b3-4)」,そして「計算術のほうは、奇数と偶数とが、奇数どうし、偶数どうし、また奇数と偶数のあいだで、どのような数量的関係をもつかということをしらべる(Gorg. 451c3-5)」というように、それぞれの働きではなく対象を区別する仕方、偶数と奇数の内容まで明記している。また、体育術と医術がともに「身体を扱う(Gorg. 464b4-7)」と言われる時も、「それぞれ同じものに関わるので、当然、たがいに共有するものはあるが、しかし異なったもの(Gorg. 464c1-3)」と簡単に済まされてしまうが、これは両技術の区別よりも、魂を対象とする政治術(立法術と正義)との区別が議論の主眼になっていたからに過ぎない。厳密には、それ以前の箇所ですれすれ触れられていたように、「虚弱(強壯)な身体」、「病気の(健康な)身体」というそれぞれ維持と矯正に分けられた働きに応じて、この世界の中にあるそれらに固有の事態を一対一対応の対象として考えられるだろう¹¹。

さらに、それぞれの技術がその対象と実践的に関わる場合についても次の

¹¹ Gorg. 452a-b.

ことを簡単に確認しておきたい¹²。

「そうすると、それぞれの技術がわれわれに提供する利益もまた、何かそれぞれに固有のものであって、けっして共通のものではないわけだね？たとえば、医術が提供するの健康、船長の操舵術が提供するの航海における安全、等々といったように」

(中略)

「いや、もし厳密に考えなければならぬとすれば、医術がつくり出すものは、あくまで健康だけであり、報酬をもたらすのは報酬獲得術のほうである。また、建築術のつくり出すものは、家であり、報酬獲得術が別にそれに伴うことによって、報酬をもたらすのだ、ということになる。その他同様に、あらゆる技術は、それぞれがなしとげる自分だけの働き(τὸ αὐτῆς ἐκάστη ἐργον)を持ち、自分が配置されている当の対象(ἐκεῖνο ἐφ' ᾧ τέτακται)に利益を与えるのだ。」

(Rep. 346a6-d7)

ここでそれぞれの技術が利益を与える対象は、医術は「健康」、操舵術は「航海における安全」、建築術は「家」だろうか。そうではない。よりの確に病気を治したり、より確かに安全を守り、より住みやすい家を造ることができるようにすること、これらは対象の利益ではなく、技術の働きの向上という技術それ自体に属する利益である。それゆえ、これらの技術が利益を与えるものとはそれらとは異なるわれわれ「人間」と解されなければならない。ただし、それぞれの技術の「対象」(ἐκεῖνο ἐφ' ᾧ τέτακται)とは、外延としての「人間」それ自体ではなく、「病気の人間」、「船に乗っている人間」、「家のない人間」などの自身だけでは自足できない人間の様々な事態を第一義に含んだ内包的对象なのである¹³。

以上、技術と一対一に対応する対象は、物事それ自体としての外延的对象ではなく、その物事の事態を第一義に含んだ内包的对象であることを論じてきた。そして、この見解は、ソクラテスが技術を特定する際に、その対象を特定することを第一の要素として探求した方法とよく整合するように思われる。Kahn は、内包的对象をわれわれの知識や技術の「知識を得る方法によって定義されるもの」として論じていたが、むしろ、逆に対象であるこの世界のあり方、すなわちこの世界にある様々な事態によって、われわれの知識や技術が

¹² 技術と価値の問題については、稿を改めて詳しく論じる予定である。

¹³ Cf. Rep. 341c-342e.

区別される、という方向がプラトンの思考に近いと思われる。その意味で、Hintikka が、ギリシア思想に特徴的な目的論 (teleology) 的な世界観を踏まえながら「知識と思わく(後述)はそれらの対象においてみずからを実現するために、それらの対象に行き当たり、触れる」と述べ、対象の性格によって知識の性格が決定されることを論じているのは正しい¹⁴。ただし、彼は知識(技術)の働きはその対象に同化 (assimilate) される(これは Gosling が対象を働きに還元した仕方とちょうど逆の仕方になる¹⁵)とまで述べてしまっているが¹⁶、Santas も適切に反論しているように¹⁷、両者が同化されるということまでは言いすぎであろう。本稿でも確認してきたように、それぞれの技術の働きがその対象と密接に結びついていることは言えるが、両者が一体であることまでは導けないのである。

6. 能力と対象の一对一对応の原則

次に、能力 (δύναμις) という概念に着目しよう。『ゴルギアス』において、ソクラテスは「この人の技術の能力は何か(447c1-2)」と問い、また『国家』第一巻において「ひとつひとつの技術をいつも区別するのは、それぞれの技術がもつ能力が別であるということによる(346a1-3)」と述べている。さらに、『国家』第五巻の一連の議論では「知識はあらゆる能力のうちで最も力づよい能力(477e1)」とも呼ばれている。それゆえ、ここまで論じてきた「技術と対象の一对一对応」の関係は、すでに技術以外の様々な感覚知覚をも含めた「能力と対象の一对一对応」の関係に還元して議論されているようにも見える。したがって、能力と一対一に対応する対象の考察は、今問題になっている技術と一対一に対応する対象のさらなる明確化にも裨益するはずである。

プラトンの能力理論を調査する上で基本的なテキストとなるのは『国家』476e-480a である。この一連の議論は、彼による能力の規定がまとまった仕方で説明される重要な箇所であるために、文脈を詳しく確認しながら分析を試みたい。

ここではまず、真の哲学者を規定するために、彼らを見物好きの連中や技芸の愛好者、実践家たちから区別することが目標である。哲学者は(美)そのものなどのイデア自体とイデアを分有するものをともに観てとる能力を持ち、両

¹⁴ Hintikka (12-3) .

¹⁵ Gonzalez (266, n.38) .

¹⁶ Hintikka (15) .

¹⁷ Santas ([1], 36-50) .

者を混同しない人であり、他方、見物愛好者たちは、アイデア自体を認めず、その認識への誘導にもついて行くことができない人である。これによって、ソクラテスは彼らが知識をもっておらず、ただ思わくしているだけであることを主張する。けれども、見物愛好者たちは、自分が知識をもっているとさらに反論してくるかもしれない。そこで、ソクラテスは、グラウコンを仮想相手として、彼らに受け入れられるような仕方です得する議論を始める。その議論は次の三つの段階に分かれる。

議論その1

- (1) ものごとを知っている人は何か($\tau\iota$)を知っている。そして、その何かは「ある」($\delta\upsilon$)ものである。(476e7-477a1)
- (2) 完全にあるものは完全に知られうるものであり、他方、まったくあらぬものはまったく知られえないものである。(477a1-5)
- (3) もしありかつあらぬような性格のものが何かあるとすれば、そのものは、純粋にあるものとまったくあらぬものとの、中間に位置づけられる。(477a6-9)
- (4) その中間的なものに対応するものは、もしそのようなものがあれば、知識と無知との中間にあるものである。(477a10-b3)

次にソクラテスは、知識と無知の中間にあるものが思わくであり、それが中間のありかつあらぬものに対応することを能力の概念を用いて証明する。

議論その2

- (5) 能力は、あるものの種族であり、またわれわれや他のすべてのものをして、それがなしうるところのことを、なしうるようにさせる力である。そしてその代表例は視覚や聴覚である。(477c1-5)
- (6) 能力の区別は、ただそれがいかなる対象にかかわるか($\epsilon\phi' \tilde{\omega} \tau\epsilon \epsilon\sigma\tau\iota$)ということと、何をなしとげるか($\delta \acute{\alpha}\pi\epsilon\rho\gamma\acute{\alpha}\zeta\epsilon\tau\alpha\iota$)ということに、着目するほかはない。(477c6-d2)
- (7) 同一の対象に配されていて同一のことをなしとげる能力のことを、同じ能力と呼び、異なった対象に配されていて異なったことをなしとげる能力のことを、別の能力と呼ぶ。(477d2-7)
- (8) 知識と思わくは能力である。(477d8-e4)
- (9) 知識は誤ることがないが、思わくは誤ることがある。(477e5-9)
- (10) したがって、知識と思わくは別のものである。(478a1-3)

- (11) したがって、知識の対象と思わくの対象は別のものである。(478a4-b4)
- (12) 思わくは、知識の対象となるあるものとは別の何か(τι)を対象とし、また、思わくするが何も(μηδέν)思わくしていないということも不可能なので、思わくは知識と無知の中間に位置づけられ、あつかつあらぬものを対象とする。(478b5-d12)

次にソクラテスは、あつかつあらぬようなものが実際に存在し、見物愛好者たちの雑多な考えがそれに対応するものであることを証明する。

議論その3

- (13) 多くの美しいものは、美しくなく現れることもある。同様に、多くのもののひとつひとつは、それが何であると呼ばれるにせよ、そのものであらぬ以上にそのものであることはない。そして、それらのものはあるものとあらぬものの中にあるものである。(479a5-d1)
- (14) したがって、美その他について多く人々がもつ雑多な考え(νόμιμα)というものは、純粹にあるものと純粹にあらぬものとの中間をさまよっている。そしてそのような性格のものは「思わくされるもの」(δοξαστόν)であって「知られるもの」(γνωστόν)ではない。(479d2-9)
- (15) したがって、多くの美しいものは見るけれど〈美〉そのものを観得することがない人たちは、思わくしているだけであり、思わくしているものを知ってはいない。(479d10-e5)
- (16) 他方、それぞれのもの自体(恒常不変に同一のあり方を保つもの)を観得する人たちは、知っているのであって、思わくしているのではない。(479e6-8)
- (17) さらに、知っている人は知識の対象(ἐφ' οἷς γνώσις ἐστίν)を愛好し、愛着を寄せるのであり、他方、思わくしている人は思わくの対象(ἐφ' οἷς δόξα)をそうする。見物愛好者たちが愛着を寄せる美しい声や色などは後者に属し、哲学者が愛好するそれぞれのあるものそれ自体(αὐτὸ... ἕκαστον τὸ ὄν)は前者に属する。(479e9-480a13)

以上このようにして、見物愛好者たちが思わくではなく知識をもつ可能性が否定されたことになる。それぞれのステップには解釈困難なところも多いが、議論その2で提示された能力理論は、全体の解釈を左右する箇所なのでまずここに着目しよう。

ここでの能力の規定の中でとりわけ注目すべき点は、『イオン』で述べられた「技術と対象の一对一対応」が能力一般に敷衍されて、「能力と対象の一对一対応」が前提されているということである。というのも、「同じ対象に異なる働きをなす」という想定上可能な選択肢は、(10)の「知識と思わくが異なる」という理由によって、ただちに(11)の「両者の対象が異なる」という結論が導かれていることから、無視されているのがわかるだろう¹⁸。

それでは、この「能力と対象の一对一対応」の原則における「対象」(ἐφ' ᾧ τε ἔσται)とはどのような意味内容をもっているのだろうか。

7. 二世界説と諸解釈批判

(i) 伝統的な解釈

プラトンは中期対話篇、とりわけ『国家』中心巻において、知識はアイデアを対象とし思わくは感覚物を対象とするという仕方で、両者の魂のあり方を認識論的に明確に区別したと一般に考えられている。その主要な典拠となるのがこの一連の議論である。多くの解釈者が、ここで知識の対象となる「あるもの」をアイデア、そして思わくの対象となる「ありかつあらぬもの」をこの世界にある事物や行為などの感覚物と同定し、「能力と対象の一对一対応」の原則によって「われわれはこの世界のものについて一切知ることができず、同様に、アイデアについて何も思わくすることができない」と論じてきた。これがいわゆる「二世界説」である¹⁹。

しかし、このような解釈は、ある同じ対象についてはじめに思わくを抱き、後に知るようになるという学習の過程や、身の回りの世界について知識を得ることの可能性を一切排除するもので、一見してプラトンの他のテキストと整合的ではないように思われる。実際、『メノン』97a-98a において「思わくが、原因の思考によって縛り付けられ、知識に転換すること」や、『テアイテトス』201a-c に

¹⁸ より正確には、(7)より「対象と働きの一対一対応」と呼ぶべきかもしれない。しかしながら、ここで能力自体とその働きはほぼ同じものとして議論されているために、「能力と対象の一对一対応」としてもよいだろう。というのも、(6)より知識と思わくを区別する要素は、「対象」と「働き」の二つのみであるが、(9)より両者の働きが異なることは既に対話者同士の了解事項として扱われている。そして、(10)ではその働きの違いからただちに能力の違いが同意されているからである。また、このような議論の進め方がなされているために「知識と思わくが異なる対象をもつが、同じ働きをする」というもう一つの可能性はこの議論では排除されている。Cf. Santas ([1], 45; [2], 51), Fine ([1], 73) .

¹⁹ 「二世界説」について明示的に論じているかいないかは別として、この説をとることになるのは Conford (179-81), Cross and Woosley (164-5), Allen (165, 169), Vlastos (69, 73-5), Hintikka (9-15), Santas ([1], 42-50) など。

において「ある同じ事件について、裁判官が思わくをもつものに対して、目撃者は知識をもつ」と述べられていることとこの解釈は矛盾する。さらにまた、この説を受け入れることはプラトン自身の『国家』全体のプログラムにも重大な困難を投げかけることになる。ソクラテスは、「洞窟の比喩」において、真実を見た哲学者たちが再び洞窟の中に降りて行かなければならないことを主張し、そこで「君たちはそこにある模像のひとつひとつが何であり、何の模像であるかを、知ることができるだろう(γνώσεσθε, 520c4)」と述べているが、これは、われわれが身の回りの世界について何の知識も得ることができないのなら、かなり理解しがたい要求になる。また、そのような三つの比喩を語る前に、ソクラテスが〈善〉のアイデアについての思わくの可能性に言及していることも(506c-e)、問題として残されるだろう。

それゆえ、この「二世界説」の問題を解消するために、知識と思わくの対象を伝統的解釈に従わない仕方 で理解する方針がとられることになった。

(ii) Fine の解釈

Fine はまず、「ある」の意味を「存在的」(existential)、「述語的」(predicative)、「真理表示」(veridical)の三つに分けた上で「真理表示」用法を採用する。というのも、「存在的」用法は、議論その1によって、「存在の程度」(degrees-of-existence)を前提することになり、「半分存在するもの」という概念は対話相手である見物愛好者たちにとって受け入れがたい。他方、「述語的」用法についても、知識が「Fであるもの」のみを対象とし、「FでありかつFでないもの」を対象としないという前提は、例えば「ある行為が正しくありかつ正しくない」ことを知りえないとするのと同様、彼らにとって自明ではないとするからである。このことから Fine は、知識の対象を「真なる命題」、思わくの対象を「真でありかつ真であらぬ命題」として、それぞれの能力が「もの」(object)ではなく「内容」(content)に対応すると解釈した。

だが、思わくの対象である「真でありかつ真であらぬ命題」をあるひとつの命題だとみなす場合、「真理の程度」(degrees-of-truth)という対話相手に受け入れがたい前提を認めることになってしまうので、知識の対象は「すべて真なる命題」、思わくの対象は「あるものは真なる命題、他のものは真であらぬ命題」という仕方 で、それぞれの対象を規定した²⁰。これによって Fine は、知識と思わくがそれぞれの認識内容の集合によって区別され、それらの認識内容が

²⁰ Fine ([1], 67-71; [2], 87-90) .

「何についてか」ということは問題にされていない、という立場を取ることになる。したがって、Fine によれば、感覚物について知り、アイデアについて思わくする可能性もここで全く除外されないことになる。

しかしながら、Fine のこの「真理表示」用法の解釈はテキストと整合しないいくつかの問題があり、Gonzalez によって詳細に論じられ反駁された²¹。例えば、Fine は「存在的」用法に対して、「半分存在するもの」が議論の前提となると批判しているが、プラトンは(3)にあるように「ありかつあらぬもの」の存在を前提ではなく仮定しているだけで、その存在は議論その3に至って結論されるものである。したがって、議論その1において「ある」の意味が「存在的」に解釈される可能性は決して排除されていない²²。彼が述べるように²³、「存在しないものを知ることができないのは、存在しないものを見ることができないことと同様と想定するのは自然」であり、感覚知覚との類比を無視しない限り、「存在的」用法は決して受け入れがたい前提ではないのである。

また、(12)に「思わくの対象はあるものとは別の何か」と述べられているが、Fine の「真理表示」の用法に従うと「思わくの対象は真なる命題とは別の何か」と読まなければならない。思わくの対象が「あるものは真なる命題、他のものは偽なる命題」と解釈するにはかなりの読み込みが必要である。さらに、その直後に「思わくするが何も思わくしていないということも不可能」という記述があるが、これも「真理表示」用法に従うと「偽なる命題を思わくすることも不可能」という意味にならざるをえない。それゆえ、Fine は無知を「全て偽なる内容」とした場合、テキストとの整合性を保つために、ここで全ての偽なる命題が無知に割り当てられているのではなく、そのうちで完全に偽なる命題のみが無知に対応するとしている。しかし、これでは Fine 自らが「真理の程度」を認めることになってしまうだろう²⁴。

さらに、Fine の解釈によると、知識と思わくの対象はそれぞれ「真の命題の集合」と「真の命題と偽の命題の集合」であるから、真の命題ひとつひとつが両者に重なり合う可能性は否定されない。したがって、(6)の能力を区別する二つの観点のうち、(9)の「知識は誤ることがないが、思わくは誤ることがある」

²¹ Gonzalez (249-53, 262-71) .

²² Fine の「述語的」用法に対する批判の Gonzalez による反論は、ここで問題となっている知識が「あるものが F である」という認識や判断ではなく、「F は何であるか」という認知であるとする点にポイントがあるが、以下で述べるように、この反論は私とは立場を異にする彼の論旨に依存しているため、必ずしも説得的とは思われない。

²³ Gonzalez (251) .

²⁴ Gonzalez (267-70) .

という能力の働き、すなわち、真と偽の命題を集める働きのみによって知識と思わくを区別することになる。これは先の Gosling の解釈と同様に、実質、能力の対象を働きに還元し、「能力と対象の一対一対応」を「能力と働きの一対一対応」として修正することで、いわゆる「二世界説」を解消しようとする試みである²⁵。しかしながら、先に技術について詳しく論じたように、能力についてもその対象が働きに還元されることは導けない。

(iii) Gonzalez の解釈

Gonzalez は、知識と思わくの対象を、Fine が述べるような真なる命題や偽なる命題としての「内容」ではなく、あくまでアイデアや感覚物としての「もの」であると主張した。その意味で、彼は伝統的解釈と立場を同じくするのだが、伝統的解釈につきまとう「二世界説」の問題を次のように解消することを試みる。

彼によれば、ここで問題となっている知識は、アイデアを直接把握することで得られる「Fは何であるか」という非命題的な認知である。それゆえ、「ある鉛筆が長い」とか「ある行為が正しい」などのわれわれの身の回りの世界についての認識や判断は、ここでプラトンが知識によって意味している事柄ではない。同様に、ここで問題となっている思わくもまた、「あるものがFである」という認識や判断ではなく、感覚物を直接把握することで得られる「Fは何であるか」という非命題的な認知である。ただし、思わくの場合は「FでありかつFでないもの」である感覚物を通じて把握するために、知識と異なって「Fは何であるか」を曖昧な仕方ではしか認知することができない²⁶。

上記の Gonzalez による解釈のポイントは次の点である²⁷。知識と思わくに一対一に対応する「対象」は、「あるものがFである」という認識や判断の対象（すなわち、その認識や判断の主語にあたるもの）ではなく、そのようなあらゆる種類の真または偽の言明の「基準」(basis)になる「Fは何であるか」という認知の対象である。それゆえ、知識と思わくに一対一に対応する「対象」がそれ

²⁵ Cf. Gonzalez (265-7) .

²⁶ Gonzalez (252-3, 257-8, 271-4) .

²⁷ Gonzalez の「二世界説」に関する解釈は、多少曖昧な点もあるが（とりわけ、われわれが身の回りの世界について認識することと、哲学者が洞窟の中に再び降りて行きその世界について認識することを、何か全く異なる事態として捉えている点は疑問である）、彼の上記の論旨をふまえる限りこのように整理してよいと思う。田中 (29-30) は、「判断の基準」と「判断の対象」という二つの事柄を区別し、ここでの能力と一対一に対応する「対象」が前者の「判断の基準」としての対象であると述べており、これは Gonzalez とほぼ同様の立場と言えるだろう。Smith もまた、ここで問題となっている「能力としての知識・思わく」の「対象」と「認識内容としての知識・思わく」の主語にあたるものを区別し、「二世界説」を回避しようとしている。

ぞれアイデアと感覚物として厳密に分けられているとしても、その対象は様々な認識や判断の「基準」という意味であり、その基準に基づく認識や判断の対象としては、アイデアと感覚物どちらの可能性も残ることになる。つまり、われわれは「真に F であるもの(=アイデア)」を通じて把握した「F は何であるか」の知識を「基準」として感覚物を正確に理解できるし、他方、「F でありかつ F であらぬもの(=感覚物)」を通じて把握した「F は何であるか」の思わくを「基準」としてアイデアを不正確に理解することもできる。したがって、「二世界説」は解消されるのである。

けれども、ここで知識と思わくに一対一に対応する「対象」が、そのような認識や判断の「基準」であるとする結論もまた、多くの疑問を残すと思われる。例えば、Gonzalez は、知識と思わくが視覚などの感覚知覚に類比されていることを重視し、その直接把握的な形態を強調しているけれども、感覚知覚の場合に、その対象が知覚判断の「基準」であると考えすることは難しい。というのも、視覚を例に考えてみると、「色(例えば赤)」という対象に対して、それを直接「見る」ことによって把握するのは「それが赤い」という知覚判断であることが自然に理解できる²⁸。視覚がその対象との関係で直接的に把握する内容は「あるものが赤い」という知覚判断であって、その知覚判断の「基準」となる「赤とは何であるか」という認知ではないのだから。

また、Gonzalez の解釈によれば、(6)の能力を区別する二つの要素のうち「働き」に対応するものは、「知る」(γινώσκει)ことや「思わくする」(δοξάζει)ことによって把握する「F は何であるか」という認知になると考えられる。彼は、この認知があくまで非命題的であり、「正義とは借りたものを返すことである」といった普遍的定義だけでなく、「ある行為が正しい」などのあらゆる命題的構造をもつ記述とも異なるとする。だが、この(6)の「働き」の要素は、能力を区別する要素として他には「対象」しかないために、必然的に(9)と連絡し、その真偽を判定できるものでなければならない。それゆえ、彼の考える「F は何であるか」という非命題的認知は、真または偽なる言明として記述されうるものではないので、プラトンのテキストと整合的ではないだろう。

さらに、(14)における一連の記述もまた Gonzalez の解釈を支持しない。というのも、(14)の前半部において、多くの人の「考え」(νόμιμα)が「さまよっている」と語られている事態とは、直前の(13)を考慮すれば、「美しいと考えているものが美しかったり美しくなかったりする」ことに応じて「それが美しい」という

²⁸ *Chrm.* 168d-e. ここで「見る」ことはエルゴンの機能の側面、「それが赤い」という知覚判断はエルゴンの所産の側面と考えられる。Cf. Santas ([1], 41-2) .

「考え」もまた揺らいでいるという事態と言つてよい。それゆえ、ここでは「あるものが美しい」という認識や判断が問題になっていると考えられる。Gonzalez も自ら認めているように²⁹、この「考え」という語は、真や偽に関わる命題構造をもつ内容を表わしているのである。そして、(14)の後半部をみると、多くの人々の「あるものが美しい」という「考え」の対象(彼らが美しいと考えているもの)は「思わくされるもの」であつて「知られるもの」ではないと述べられている。この「知られるもの」と「思わくされるもの」とは、議論その2において、「知る」ことや「思わくする」ことの目的語や、知識と思わくの「対象」(ἐφ' ᾧ τε ἔστι)に言い換えられていたものである。したがつて、この知識と思わくの「対象」はあくまで「あるものが F である」という認識や判断の対象ということになるだろう。ただし、この「考え」という語はしばしば「多くの美しさ」などといった「多くの基準」とみなされ、ここでの「対象」が認識や判断の「基準」であるとする解釈者によって有力な根拠として用いられることがある³⁰。けれども、White が適切に反論しているように、そのような意味は与えられない³¹。なぜなら、この議論では「多くのもの」として「美しいもの」だけでなく「二倍(半分)のもの」や「大きい(小さい)もの」、「重い(軽い)もの」なども挙げられているが、これらの「基準」までもが多くの人々にとって揺らいでいるという事態は想像しがたいからである。したがつて、多くの人の「考え」がさまよっているとは、「何であるか」という認識や判断の「基準」の認識が揺らいでいるという事態ではなく、「ある同じものが二倍とも半分とも判定されてしまう」という認識や判断に関わる事態と考えるべきなのである。

8. 二世界説の解消へ向けて——能力における対象概念——

「二世界説」を解消する道はあるのだろうか。私は、ここで知識の対象となる「あるもの」をイデア、そして思わくの対象となる「ありかつあらぬもの」をこの世界にある事物や行為などの感覚物と早計に同定してしまわないことが必要だと思う。この一連の議論は、イデアの存在を決して信じることがない見物愛好者たちに代わつて、グラウコンが対話の受け答えをするという設定である。Gosling が正しく指摘しているように、そのような見物愛好者たちが受け入れ

²⁹ Gonzalez (256) .

³⁰ 田中 (29)。(13)と(14)を「多くの基準」と解するのは Adam, Gosling [1]など。Fine ([1], 80-1, [2], 91-3) も同様の立場であるが、彼女は(14)の νόμιμα の内容を「正義とは借りたものを返すことである」などの定義と考えているために田中の立場とは異なる。

³¹ White (130) .

られる仕方とは、なによりもまずアイデア論を排して議論をすることだ³²。この文脈においては、知識と思わくの対象が「あるもの」と「ありかつあらぬもの」と言われているとしても、アイデアと感覚物という枠組みの外で議論が進んでいる。

「あるもの」と「ありかつあらぬもの」とは、議論その1では「存在するもの」と「存在しかつ存在しないもの」、議論その3では、例えば「美しいもの」と「美しくありかつ美しくないもの」に言い換えられるようにみえる(とくに、(13)の後半では「FでありかつFでない」から「存在しかつ存在しない」が導かれているように思われる)。この移行は、ここでの主体をアイデアや感覚物などとみなす限り、うまく説明できない³³。Cross and Woosley らが批判しているように、例えば「〈4〉のアイデアが2の二倍であり8の半分であるならば、その〈4〉のアイデアは存在しかつ存在しない」とか「ある花が美しくありかつ美しくないならば、その花は存在しかつ存在しない」という推論は明らかに成立しない³⁴。

これに対し Gonzalez は、Kahn の研究も参照しながら³⁵、「ある」の「存在的」用法と「述語的」用法を共存させる仕方では解釈している。彼は「プラトンはあるものの実体(x)とその属性(F)、または、あるものの存在とその本質を現代のわれわれがしているようには区別していない」と主張し、それゆえ「Fの不確定さはxが十分に存在することを妨げ、他方、十分にFであることはxが十分に存在することである」として両用法の間に矛盾はないとする³⁶。この見解は、確かに Cross and Woosley らが挙げていた問題に適切に答えるものである。しかしながら、たとえあるものの属性がそのものの本質だとしても、属性の如何

³² Gosling ([2], 120-2) .

³³ Annas (196-9, 208) は議論その1において「存在するものは知られうる」ということは自明ではないし、Fine と同様「存在の程度」という理解不能な概念も生むという理由で、「存在的」用法を拒否する。そして、「真理表示」用法と「述語的」用法の可能性を見たうえで、議論その3も考慮すると「述語的」用法を議論その1から想定する方が全体としてよいと考えている。田中 (24-5) も補語を補い「述語的」用法をはじめから想定することを提案している。ただし、議論その1の段階でなんらかの補語を補足しながら読むことはかなり困難に思われるし、私も Gonzalez のように「存在的」用法から「述語的」用法にプラトンが容易に移行できた理由をひとまず考えるべきだと思う。

³⁴ Cross and Woosley (161-4) や Vlastos (70-3) は実際にこのような推論を想定して、プラトンの議論が誤謬だと判定している。また、Fine ([1], 79) や Annas (197) は、プラトンにこのような推論を帰せないように、それぞれ「ある」の意味を別の仕方では解釈するのである。Cf. 田中 (26-8)。

³⁵ Kahn ([1], 250-2) は「ある」が単独で使われたとしても、その意味の中心は「そうである」(is the case) という「真理表示」用法にあり、「存在的」用法や「述語的」用法はその特殊なケースであると述べている。それゆえ、「ある」の「そうである」としての「真理表示」用法は、「存在的」用法と「述語的」用法の基盤にあり、両者の共存は決して難しいものではない、と彼は考える ([2], 130, n. 18)。また、Kahn の「真理表示」用法は「そうである」ということであって、Fine のように「真である」と解されるものではない。

³⁶ Gonzalez (258-62) .

によってそのものの存在が左右されるような結びつきとはどのようなものか、いまだ疑問が残る。Gonzalez は、プラトンの「 x は F である」という述定において「第一義的なのはその述語である」と正しく指摘していたけれども³⁷、この x にアイデアや感覚物が代入されるものとみなしているのは明らかであり、そのために不徹底な解釈に留まっていると言わざるをえない。

以上より、プラトンが問題にしているのは、アイデアや感覚物の存在やその性状ではなく、一貫して「美しい」などの F という事態なのである。このように理解すれば、議論その1と議論その3において「ある」の用法がなんのこともわりもなく「存在的」用法から「述語的」用法に移行していることも説明がつく。すなわち、「美しいもの (Fx) が存在する」ということと「あるもの (x) が美しい (F)」ということとは、 F という事態に着目した記述である限り、同一の事柄を異なる観点によって述べているというだけの相違にすぎない。「美しいと思っていたものが醜く (美しくなく) 現れた場合に、その美しいものが存在しなくなった」という言明は自然に理解されるものだろう。

したがって、先に技術と対象について詳述したように、ここでも能力と一対一に対応する対象とは F という事態を第一義に置いた内包的対象だと考えることができる。知識の対象は「 F である (限りの) もの」であり、思わくの対象は「 F でありかつ F でないもの」である。そしてそれらの両者の能力は、そのような事態が適用される外延としてともに感覚物とアイデアの両方に関わりうる。

まず前者の場合に関して、このわれわれの世界は、確かに生成消滅や絶えざる変化によって常に一定のあり方を保つものではないかもしれない。しかしながら、その事実はある条件のもとで一定の「 F である」という記述までも受け入れないということを意味しない³⁸。

例えば、あるひとつの花がある条件のもとで「美しい」と現れ、また別の条件のもとで「醜い」と現れているとしよう。知識の能力の場合には、それらの「美しい (という限りの) 花」と「醜い (という限りの) 花」を別々のものとして捉え、それぞれについて「それが美しい」または「それが醜い」と知ることができる。他方、思わくの能力の場合には、それらをひとつの「美しくありかつ醜い花」として捉え、「それが美しかったり醜かったりする」と思わくすることしかできない。すなわち、知識とは、「これが F である」という仕方で、この世界にある「(ある条件のもとで) F である (限りの) もの」を同定する能力であり、思わくとは、「これが F であるのか F でないのかどちらとも判定できない」という仕方で、「 F でありかつ F で

³⁷ Gonzalez (254) .

³⁸ Cf. *Symp.* 211a.

ないもの」を同定する能力と言ってよい。そして、知識と思わく的能力がともにこの世界にある存在に関わりながら、それぞれが異なる対象に配置されることになるのは、そのような意味で、この世界の切り分け方が異なるからに他ならない。この解釈に従うならば、伝統的解釈が告げるような「われわれの世界について知識が一切成立しない」という問題は解消されるだろう。

『国家』第七巻 523e-524cにおいて語られた「三本の指の比喩」もこの解釈を裏づける証拠となる。薬指は中指と比べた場合に「小さいもの」であり、小指と比べた場合に「大きいもの」である。視覚(思わく)³⁹はそれら二つの事態にあるものを、同じひとつのものとして知覚するためにアポリアに陥ってしまう。けれども知性は、それら二つの事態にあるものを融合したものとしてではなく、区別されたものとして認識する。両者の重要な分岐はこの点にある。ここで、知性によって区別された「大きいもの」と「小さいもの」がただちに薬指から離在したアイデアであるわけではないことは明らかだろう。「大きくありかつ小さい指」として融合しているものを「大きい(限りの)指」と「小さい(限りの)指」という仕方で区別すること、それはこの世界の分節を「見られるもの(思わくされるもの)」(ὄρατόν)から「知性によって知られるもの」(νοητόν)として捉え直すことに対応しているのである。

次に後者の場合に関して、例えば、〈善〉のアイデアについて思わくするという場合も、思わくと一対一に対応する対象が〈善〉のアイデアであるわけではない。例えば、ソクラテスが〈善〉のアイデアを太陽の比喩を用いて語る場合、ひとまずそれを「太陽」として捉えていることになる。すると、「太陽」はなんらかの条件のもとで必ず「悪い」という事態を含意するために、そのような思わくは決して「善い(という限りの)もの」を区別して対象とすることはできず、〈善〉のアイデアについて「善くありかつ悪いもの」を対象としていると言えるだろう。ここでも、プラトンの能力と対象の一対一対応の原則は「二世界説」を含意しないのである。

ただし、知識と思わくがともにこの世界に関わるという前者の場合に、私の解釈は、それらの対象の相違をこの世界の切り分け方の違いとして考えるものであるが、先の Fine らの解釈と同じように、対象を働きに還元しているわけではない。なぜなら、そのような世界の分節それ自体は、能力の働きによってもち込まれるものではなく、すでにこの世界の側にあるものなのだから。アイデア論を前提していた先の議論(475e-476d)において、この世界にあるものはすべて、〈美〉や〈正〉などの実相を「分けもっているもの」として記述されていた。

³⁹ ここで視覚と思わくはほぼ同じ意味として述べられている。Cf. Rep. 510a9.

そして、それらの実相が「いろいろの行為と結びつき、物体と結びつき、相互に結びつき合っ」てこの世界に「多くのもの」として現れる、と説明されている。このような世界観が想定されているとすれば、知識の能力が「これは美しい」と知ることや、思わく的能力が「これは美しかったり美しくなかったりする」と思わくすることは、あらかじめそのような分節を持たないこの世界に対する間接的な認識判断ではない。そうではなく、そのように認識判断された「美しいもの」や「美しくあかつ美しくないもの」の構造は、その作用が起こる前にすでにこの世界に組み込まれているものである。ゆえに、知識や思わくは、われわれの世界にある「美しいもの」と「美しくあかつ美しくないもの」を、その働きに応じて、それぞれ「それが美しい」、「それが美しかったり美しくなかったりする」といった仕方で、直接把握する能力なのである。

Fine と Gonzalez は、ここで問題になっている知識と思わくについて、それらが命題構造をもつ記述的なものか命題構造をもたない直接把握的なものか両者を排他的な仕方で論じていた。しかしながら、私の解釈に従えば、それらは決して相容れない選択肢なのではなく、直接把握でありながら、同時に命題構造をもつことができる。したがって、(9)にあるように、両者の能力がなしとげる認識や判断の内容に関して、その真偽も当然問題になりうる。このように解釈してはじめて、(6)の能力を規定する上での対象と働きの二つの基準が、先に見た視覚や聴覚との類比関係を保持しながら、互いに連動していることも適切に理解されるだろう。

最後に、私の解釈に対して生じると思われる疑問について確認しておきたい。それは、知識と思わくの対象が、たとえアイデアと感覚物という枠組みの外で議論されているとしても、(15)と(16)において、結局それらがアイデアと感覚物として結論されているのではないか、というものである。しかしながら、そこでプラトンは「知っている」ことや「思わくしている」ことの目的語(対象)がアイデアや感覚物だと述べてはいない。むしろそれらの対象についてはオープンであると言うべきだ⁴⁰。この結論に含意されているのは、「F である(限りのもの)」を対象とし「それがFである」と「知る」ために、アイデアの観得が必須の要件だということにすぎない(もちろんこの一連の議論はその要件の必要性を論証してきたのではない)。ただし、(17)に関しては多少事情が異なる。(17)はアイデア論を用いた直前の議論を受けるものであり、一応この一連の議論とは直接関係がないとしてよいのかもしれない。けれども、ここではアイデアや感覚物が知識と思わくの「対象」(ἐφ' οἷς)であると述べられているようにみえるので、先の疑問は依

⁴⁰ Cf. Fine ([1], 82) .

然として有効だろう。この問題に対してはまず、見物愛好者たちが愛着を寄せる「美しい声や色」とは、これも先に述べたように、「声」や「色」それ自体（感覚物それ自体）といった外延を意味しているのではないことに注意されたい。それらは、「多くの美しいもの」と同じように「美しくありかつ美しくないもの」という内包的対象の言い換えなのである。そして、アイデアについても、ここでプラトンが述べているのは「アイデアだけが知識の対象である」ということではないだろう。「純粋に（完全に）F であるもの」としてのアイデアが知識の対象であることは当然だとしても、この世界における「F であるもの」を知識が対象とする可能性は決して排除されていないのである⁴¹。

9. 残された問題——結論にかえて——

ここまでの対象概念の分析が正しければ、プラトンにおいて知の個別性と全体性はある特殊な仕方によって保たれていることになる。まず、それぞれの個別的知は、決して他の知と融合してしまうような全体性が要求されているのではない。しかしながら、それらの知は、すべてその働きに応じた固有の内包的対象を持ちながらも、その外延として互いに同じものに関わることができる。ただし、その内包的対象の規定は、Kahn が「知識を得る方法によって定義されるもの」と述べていたように、われわれの認識に応じた区別をいまだ不定のこの世界に持ち込むことではない。逆に、認識活動の区別は、この世界にある分節に従って成立しているのである。そのような意味で、本稿による対象概念の分析は、プラトンの世界観と決して切り離すことができず、存在論の問題にまですでに足を踏み入れているとすることができるだろう。

『国家』第六、七巻に目をやると、本稿で分析した内包的対象の規定も、結局そのようなプラトンの全体的な世界観に依存すると考えざるをえない。とりわけ、アイデアとこの世界との関係は本稿において詳しく論じられなかったものの一つである。後に、思わくの対象である「ありかつあらぬもの」は「生成消滅するもの(485b2, 508d7)」と言い換えられ、「線分の比喩」では、たとえ数学的对象が何かという問題はあるにせよ、やはり知識と思わくの対象の区別がアイデアと感覚物の対比として捉えられているようにも見える。さらに「洞窟の比喩」に至っては、そのようなアイデア界とわれわれの世界は、「あるもの」と「ありか

⁴¹ Annas (209-11) もまた、アイデアだけが知識の対象ではないことに注意し「二世界説」を解消しようとしている。しかしながら、彼女がアイデア以外で知識の対象と認めるのは、この世界のうち「人間である」というような実体的な属性に関わる事柄だけであり、「美しい」などの関係語に関わる事柄はそのアイデアにしか知識を認めていない。

つあらぬもの」の外延としても、両者が決して重なり合わないかのような印象を受ける。実際、「生成するもの」から「あるもの」へ到達するために、われわれは「魂全体の向け変え」を必要とするのである。

しかしながら、そのような印象を生む主な原因が、この『国家』第五巻の能力論にあることもまた事実である。『国家』第五巻において、プラトンは必ずしも「二世界説」にコミットしているとは言えない。確かに、このことは他の箇所についても彼が「二世界説」にコミットしていないということの意味しないだろう。けれども、プラトンが構想した〈善〉のアイデアを頂点とするこの世界の存在と認識の構造が、実際に「二世界説」を帰結するものであったのかどうか、より注意深く考察すべきことをこのことはよく示していると私は思う。

(京都大学・博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC)

文献表

- Adam, J.:1902, *The Republic of Plato*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Allen, R. E.:1961, "The Argument from Opposites in *Republic V*", *Review of Metaphysics* 15, 165-175.
- Annas, J.:1981, *An introduction to Plato's Republic*. Clarendon Press, Oxford.
- Benson, H. H.:1997, "Socratic Dynamic Theory: A Sketch", *Apeiron* 30, 79-93.
- Brickhouse, T. C., Smith, N. D.:1994, *Plato's Socrates*. Oxford University Press, New York.
- Canto, M.:1989, *Ion*. Flammarion, Paris.
- Cornford, F. M.:1941, *The Republic of Plato*. Clarendon Press, Oxford.
- Cross, R. C. and Woosley, A. D.:1964, *Plato's Republic: a philosophical commentary*. Macmillan, London.
- Fine, G. [1]:1978, "Knowledge and Belief in *Republic V*", in *Plato on knowledge and forms: selected essays*, Clarendon Press, Oxford, 66-84.
- Fine, G. [2]:1990, "Knowledge and Belief in *Republic V-VII*", in *Plato on knowledge and forms: selected essays*, Clarendon Press, Oxford, 85-116.
- Gonzalez, F. J.:1996, "Propositions or Objects? A Critique of Gail Fine on Knowledge and Belief in *Republic V*", *Phronesis* 41, 245-275.
- Gosling, J. C. [1]:1960, "*Republic Book V: ta polla kala etc.*", *Phronesis* 5, 116-128.
- Gosling, J. C. [2]:1968, "*Doxa and Dunamis in Plato's Republic*", *Phronesis* 13, 119-130.
- Hintikka, J.:1973, "Knowledge and Its Object in Plato", in J. M. E. Moravcsik (ed.), *Patterns in Plato's Thought*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht-Holland, 1-30.

- Irwin, T.:1977, *Plato's moral theory: the early and middle dialogues*. Clarendon Press, Oxford.
- Kahn, C. H. [1]:1966, "The Greek verb 'to be' and the concept of Being", *Foundations of Language* 2, 245-265.
- Kahn, C. H. [2]:1981, "Some Philosophical Uses of 'to be' in Plato", *Phronesis* 26, 105-134.
- Kahn, C. H. [3]:1996, *Plato and the socratic dialogue : the philosophical use of a literary form*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Parry, R. D.:1996, *Plato's craft of justice*. SUNY series in ancient Greek philosophy State University of New York Press, Albany.
- Roochnik, D.:1986, "Socrates' Use of the *Techne*-Analogy", in H. H. Benson (ed.), *Essays on the Philosophy of Socrates*, Oxford University Press, New York.
- Santas, G. [1]:1973, "Hintikka on Knowledge and Its Objects in Plato", in J. M. E. Moravcsik (ed.), *Patterns in Plato's Thought*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht-Holland, 31-51.
- Santas, G. [2]:1990, "Knowledge and Belief in Plato's *Republic*", in P. Nicolacopoulos (ed.), *Greek Studies in the Philosophy and History of Science*, Kluwer, Dordrecht, 45-59.
- Smith, N. D.:2000, "Plato on Knowledge as a Power", *Journal of the History of Philosophy* 38, 145-168.
- Vlastos, G.:1965, "Degrees of Reality in Plato", in *Platonic Studies*, Princeton University Press, Princeton, 58-75.
- White, F. C.:1978, "J. Gosling on τὰ πολλὰ καλὰ", *Phronesis* 23, 127-132.
- 金山弥平:1981年,「プラトンに於ける認識とその対象——思わくとく線分の比喩におけるディアノイアについて——」,『古代哲学研究』,第十三号,1-12。
- 瀬口昌久:2005年,「徳と技術——『国家』第一巻におけるクラフト・アナロジー——」内山勝利,中畑正志(編),『イリソスのほitori』所収,88-113。
- 田中邦夫:1973年,「ΦΙΛΟΣΟΦΟΣ と ΦΙΛΟΔΟΞΟΣ の区別の基準としての ΓΝΟΣΙΣ と ΔΟΞΑ・その二」,『古代哲学研究』,第五号,21-33。

付記 本稿は「平成21年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果」の一部である。